

## Oceanic Ecodynamics COmparison in the Subarctic Pacific (OECOS)研究プロジェクトについて

環北太平洋諸国の海洋研究者(特に生物)の北太平洋亜寒帯生態系の東西比較の興味は1992年のPICES\*の第一回年次総会を機にその後大きく前進した。動物プランクトンでは当時、東部海域ではすでにステーションPで大型カイアシ類(*Neocalanus*, *Eucalanus*)の生活史が明らかにされていたが、西部海域では比較しうる知見が無かった。親潮域(Site H)を中心とする西部海域で、これらの大型カイアシ類の生活史が明らかにされたのは1995年以降である。これら大型カイアシ類の生息環境として、Site Hと比較して、ステーションPでは水温は若干高め、季節変動幅は小さく、植物プランクトンの春期ブルームは見られないと云う特徴をしめす。しかし、これらの環境特性は必ずしも大型カイアシ類の寿命や生活史サイクルに反映しておらず、両海域の大型カイアシ類は季節的に同調したパターンを示した。

OECOSは、北太平洋亜寒帯の東部(ステーションP)と西部(Site H)においてこれまで一ヶ月で1~数回のサンプリング頻度で概略明らかにされたプランクトン生物の発育、プランクトン生物間の相互作用、プランクトン生物と非生物環境のプロセスをさらに詳細に解析するため、一年を通して生物活動が最も高い春期に1日1~数回の高サンプリング頻度を行い、相互比較を行うことによって広大な北太平洋亜寒帯の生態系の理解を深めることを目的として提案されたプロジェクトである。東部ではオレゴン大学 Miller 教授が、西部では北大の池田が中心となって、プロポーザルを作成し昨年10月ハワイで開催されたPICESの第13回年次総会でPICESの生物海洋科学委員会(BIO)の活動の一部として承認を受け、今年5月23~24日オレゴン大学でワークショップを開催、東部、西部のメンバーが集まって今後の進め方について協議した。

今回のゼミでは、このようなOECOS企画の背景と、何故OECOSが必要か、について具体的な事例を挙げて説明する。さらに、現在直面工面している親潮域での高頻度採集デザインの難しさについても触れる。

\*PICES = パイセス (正式名: North Pacific Marine Science Organization:北太平洋海洋科学機構), 日本、米国、カナダ、ロシア、中国、韓国が加盟し、毎年一回各国回り持ちで年次総会を開催、当該海域の海洋科学における様々な問題について協議し、解決を図る国際機関。4つの科学委員会が設置され、北大からも委員が選出されている。

池田 勉

\*\*\*\*\*

次回(6/23)は水上さんと立花さんをお願いしています。